From *Dai Nihon Shiryo*

1/6件 【巻頁】 2巻 45頁 【出典名】 播磨浄土寺文書 【和暦年月日】

建久３年９月２７日(11920090270) 【文書名】 621 僧重源下文 【P45】 ＃６２１

<u>読み下し文</u>

下す。東大寺領播磨国大部御庄＜「造東大寺大勧進」＞。
早く鹿野原荒野を南無阿弥陀仏別所に寄附し、即ち寺の沙汰として開発致すべし。
其の地利を以て、浄土堂并薬師堂仏聖灯油及不断念仏衆相節等に宛て用ふる事。
右、当庄内に数宇（すううう）の旧寺有り。併せて以て破壊す。（Or, 当庄内に有る数宇（すううう）の旧寺、併せて以て破壊す。）須く皆悉く修理を加ふべしと雖も、本寺の造営、未だ功を終せざるの間、余、営む隙無し。（或は？）之を見ながら亦、修復致さざらば、恐罪の報ひ遁れ難きものか。茲に因り、当庄の東北字鹿野原片端（行端？）[1]に卜し、朽ち残る堂具を取り集め、仏閣一宇を構へ立て、数体の仏像を安置す。其の別所を南無阿弥陀仏寺と号し、其の堂を薬師と号す。又、新たに浄土堂一宇を加へ立つ。皆、金色の阿弥陀仏丈六三尊の立像を安置し奉る。即ち、三十口浄侶に相ひ語らひて、勤行不断の高声の念仏は、聖朝安穏・御願円満・自他法界・滅罪生善を祈り奉る所の由也。仍て其れ、仏聖灯油并びに念仏衆の衣食等に宛て用ひんが為、鹿野原一所に割り（割き）分けて、永く堂領を件の所に寄附す。往年已来、常々荒野と為し、寄作の人無く、徒に猪鹿の栖と為り、地味（ちみ）[2]を失ふ。而るに今、彼の用途料に寄附し、始めて開発を致す所なり。

<u>現代日本語訳</u>

東大寺領播磨国大部御庄＜「造東大寺大勧進」＞に下す。
早く鹿野原荒野を南無阿弥陀仏別所に寄附し、直ちに寺の沙汰として開発せよ。
その土地の収穫を浄土堂と薬師堂の仏聖灯油および不断念仏衆の経費に充当し使うことについて。
右は、当庄内にいくつか旧寺が存在するが、それらは全て破壊されてしまっている。[これらの旧寺を] みな全て修理しようとしても、本寺の造営がまだ完了していないので、私には[旧寺の修復を] 行う隙がない。こういう状態を知りながらも、修復しないならば、深い罪の報ひを逃れがたいのではないだろうか。そう言ういう訳で、当庄の東北字鹿野原片端を占い定め、朽ち果てていながらも残って

---

[1] 片端：１）一方の端。２）一部分。極めて僅かのもの。
行端（ゆきは）：行くべき方。行くべき所。行き先。
[2] 地味：作物栽培についての、地質の良否の状態。